特　集｜平成 30 年度「文化財保存修復を目指す人のための実践コース」実施報告
NPOJCP 九州支部事業
「知覧特攻平和会館所蔵文書類の保存状態詳細調査」を取材して

特定非営利活動法人
文化財保存支援機構機構
季刊誌

NPO JCP NEWS

35

2019.10.30

大子那須楮（茨城楮生産現場体験学習でお世話になった大子那須楮保存会会長 齋藤邦彦様宅にて）

報告 1

令和元年度定例総会を開催

JCP の平成３１年度定例総会は、6 月 15 日 (土)、都立産業貿易センター (東京都台東区) にて行われました。平成 30 年は東京・関西・九州と支部が増えてから本格的に事業を展開した一年となりました。支部拡大に伴い会員の皆様の活躍の場がより一層広がるよう、活動を広げていきたいと思います。　本報告では、平成 30 年度決算、令和元年度予算などお伝えいたします。

◇◇

開催日時：令和元年 6 月 15 日 (土)　14:45 ～ 16:45
会　　場：東京都立産業貿易センター
（〒 111-0033　東京都台東区花川戸 2-6-5）
出席者　：理事 6 名、監事 1 名、事務局 4 名
委任状 3 名、会員 1 名、非会員 1 名
(上記の内、維持会員は 11 名)

◇◇

議事次第
維持会員 14 名中、委任状を含む 11 名が出席。定款 25 条に基き、総会は成立。次に三輪理事長が議長に選出された。

議案１．　平成 30 年度決算報告／事業報告
平成 30 年度決算報告は下記のとおり。

【収入】

・一般会計収入計	￥5,721,640
（会費、寄付等）	
・事業収入	￥96,950,940
当期収入計	￥102,671,734

【支出】

・一般会計支出計	￥21,443,452
（家賃、人件費、旅費、通信費、消耗品費等）	
・事業支出計	￥66,485,594
当期支出計	￥87,929,046
当期収支差額	￥14,742,688

※震災寄付金特別会計については、平成 30 年度は個人 7 件、法人 1 件から合計 137,000 円の寄付が寄せられました。内、熊本の被災文化財調査などで 197,888 円を使わせていただきました。現在残高は 670,592 円となっております。豪雨をはじめ毎年のように各地で災害が頻発しております。引き続き暖かいご支援をよろしくお願い申し上げます。

平成 30 年度事業報告
①文化財の保存技術の研究開発　本部 1 件
②文化財保存修理専門家の養成、研修事業
本部 1 件、関西支部 5 件、九州支部 2 件
③災害救援活動　本部 6 件、関西支部 1 件、九州支部 2 件
④その他　本部 4 件、九州支部 1 件

議案２．　令和元年度事業計画 (案)/ 予算 (案)
①　文化財の保存技術の研究開発　本部 1 件
②　文化財保存修理専門家の養成、研修事業
本部 1 件、関西支部 2 件、九州支部 3 件
③　災害救援活動　本部 6 件、関西支部 1 件
④　その他　本部 5 件、九州支部 1 件

予算案

【収入】

・一般会計収入計	￥6,256,000
（会費、寄付等）	
・事業収入計	￥90,305,784
当期収入	￥96,561,784
前期繰越収支差額	￥14,742,688
計	￥111,304,472

【支出】

・一般会計支出計	￥29,210,070
・事業支出計	￥69,954,017
今期支出計	￥99,164,087
次期繰越収支差額	￥12,140,385
計	￥111,304,472

議案３．　役員改選について
役員の任期満了に伴い理事 8 名、評議員 1 名の継続就任が諮られ満場一致で承認された。また監事は任期満了に伴い、池田和彦氏から長谷川雅啓氏へ改選された。
上記 9 名の任期は令和元年 7 月 1 日 ~ 令和 3 年 6 月 30 日まで。

議案４．　会員の動向
6 月現在 342 件の登録がある。平成 30 年度の入会 49 件、退会 17 件。全体的に会員数は微減傾向にある。より良い活動のため積極的な広報活動に努め、特に登録会員の拡大につなげていきたい。　以上。

報告2

座談会『文化財を活用する－文化財保護法の改正にあたって』

平成 31 年 3 月 24 日（日）、台東区民会館に於いて、JCP 登録会員の井上敏先生（桃山学院大学准教授）、宇田川滋正先生（行政職）お二人を招いて「文化財を活用する － 文化財保護法の改正にあたって」と題して座談会を開催しました。平成 30 年の通常国会において文化財保護法改正が決定され、平成 31 年 4 月 1 日より施行となりました。重要な改正として「活用」が新たに組み込まれました。これを受け、従来の法制の改正点や今後考えうる影響などを捉えようという試みです。

開催日時：2019 年 3 月 24 日（日） 13:30 ～ 16:30

会　　場：東京都台東区民会館　第一会議室
（〒 111-0033　東京都台東区花川戸 2-6-5）

出 席 者：理事 8 名、本部事務局 3 名、関西事務局 1 名、
NPOJCP 会員 2 名、外部参加者 1 名

講　　師：井上 敏先生
/NPOJCP 登録会員、桃山学院大学准教授
宇田川 滋正先生
/NPOJCP 登録会員、行政職

井上先生より、教育の現場から考えられること、文化財をとりまく地域の現況と保護法改正にあたり学芸員のありかたについてお話を頂きました。宇田川先生からは具体的な法改正の変更や、それに付随してくる影響など今後文化財に関連する業務に従事している方々にとってポイントとなる点を伺うことができました。

特徴として①地域における文化財の総合的な保存と活用をはかるために都道府県で大綱を作成することが可能になる。②美術館・博物館へ寄託した場合、相続税納付が猶予される。③所有者が保存と活用のプランニングが可能となり、地方自治体へ相談ができる。といった 3 点が挙げられ、JCP として法改正にどう関わっていけるかなど参加者や理事を含めて議論が行われました。結論として市区町村レベルに積極的にアプローチし、JCP が持っている人材バンクをより活用するべく働きかけていくこととなりました。

座談会の様子、議論で白熱する場面も！　　（左：井上先生、右：宇田川先生）

特集1

平成30年度「文化財保存修復を目指す人のための実践コース」開催報告

当機構セミナーは、「文化財保存修復を目指す人のための実践コース」としてテーマを設けて年4コースを設定するという、新たなプログラムで開催しておかげさまで2年が経ちました。平成30年度は“和紙”をテーマに、年間通して昨年度より多い総勢48名の受講者が集まりました。セミナー後半では、11月5日～7日に高知研修ツアー、2月7日～8日の茨城楮生産現場体験学習が行われました。受講者は高知研修ツアーが11名、茨城体験学習が12名と多くの方が参加してくれました。

高知研修ツアー

日本有数の紙の産地の一つである高知県を巡るツアーです！高知龍馬空港に到着し、コーディネーターを引き受けてくれた当機構会員の一宮佳代子さん（いの町紙の博物館非常勤専門職員）と合流しました。

天気にも恵まれ、11月に入っても少し暖かい高知。仁淀川の清流に沿って、多くの製紙工場や紙漉き工房が点在しています。今回は、高知県立紙産業技術センター、三和製紙株式会社、鹿敷製紙株式会社、尾崎製紙所、いの町紙の博物館を訪問しました。

集合写真：高知県立紙産業技術センターにて

3日目のお昼に、佐川町の「名教館」（高知県文化財指定）にてお弁当！

1日目

初日の見学先は高知県立紙産業技術センターです。主任研究員の有吉正明先生に施設見学と、繊維分析デモンストレーションを行っていただきました。

施設見学　右が有吉正明先生

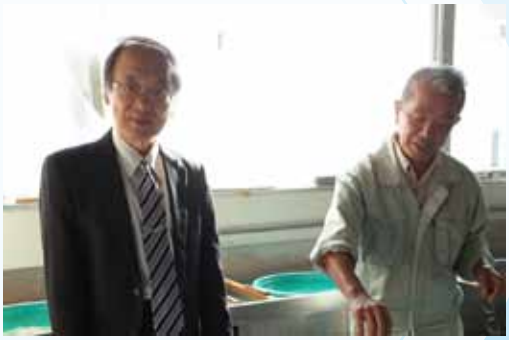
楮、竹、藁などの繊維を分析

2日目

2日目は午前に三和製紙株式会社を訪問、文化財修理でも用いられるサンモアの製造会社です。
午後は、高知県立紙産業技術センターへバスで戻り、前所長の関正純先生による講義「機能紙について」を拝聴しました。午後2つめの見学先は、鹿敷製紙株式会社です。手作業と抄紙機と組み合わせ、ニーズに応じた和紙製造現場を見学しました。

三和製紙（株）見学：製品の説明をきく様子
森澤正博社長（右から3番目）からもお話を頂戴しました！

鹿敷製紙（株）見学：貴重な国産楮を拝見
中央：濵田博正社長
右：大川昭典先生（和紙技術研究者、紙産業技術センター元所長）



左：関正純先生（紙産業技術センター前所長）
右：江渕栄貫先生（選定保存技術「表具用手漉和紙（補修紙）製作」保持者、高知県立紙産業技術センター非常勤職員）
江渕先生は文化財保護の功労者として旭日双光章を受賞されています。

3日目

3日目は、いの町紙の博物館館長の濵田美穂様と合流し、午前は仁淀川上流の尾崎製紙所へ伺い、段々の楮畑とこだわりの工房施設を拝見しました。帰りにアンテナショップ Kaji-House で和紙などを購入しました。午後は、いの町紙の博物館へ。池典泰先生による講義で高知県の紙産業史を学んだ後、和紙漉き体験もしました。池先生と濵田館長に館内を案内していただきました。

←尾崎製紙所見学：原料の水晒し（右から二番目が四代目片岡あかり様、右奥が片岡久直様）
水が綺麗！
他にも窯や漉き場、干し場などを拝見しました。

←池典泰先生（いの町紙の博物館非常勤専門職員、高知県立紙産業技術センター元所長）による講義「高知県の紙産業史について」

いの町紙の博物館 館内見学

高知研修ツアーに参加して

山口　麻諭子
（JCP 会員）

楮の水晒し（尾崎製紙所）

平成 30 年度の文化財保存修復を目指す人のための実践コースは、年間を通して「紙」をテーマとしており紙作品の保存修復に携わる者として大変興味深いものであった。全てのコースに参加できたら良いのだが、スケジュール調整が叶い 11 月 5 日～ 7 日に開催された高知研修ツアーに参加することができた。

高知はいつか訪れたいとずっと願っていた場所である。製紙産業の手漉き・機械抄きどちらにおいても長い歴史があり、学生時代から現在に至るまで使用する和紙や不織布の生産地のひとつであるからだ。

2 泊 3 日の内容はとても充実していた。1 日目は 10:30 に高知空港到着ロビーに集合し、ホテルへ荷物を預けてから各自自由に昼食をとる。少し時間があったのでホテル周辺を散策したが、見事に晴れ渡った青空のもとヤシの木が街路樹として並んでおり、高知は南国だ、坂本龍馬など開放的で国際的な人が生まれる雰囲気がある、と感じたことを覚えている。午後は高知県立紙産業技術センターにて施設見学と繊維分析デモンストレーションを受けた。手すき抄紙室、原料処理室（各種パルプ、化学繊維）、抄紙機、不織布製造装置、恒温恒湿室、展示ロビーを見学した。非木材分析室での繊維分析デモでは雁皮、楮、明治時代の新聞紙、竹紙のそれぞれの特徴を見ることができた。全国から依頼を受けて様々なテストや特別な抄紙を行っており、県の施設であることに驚いた。

2 日目は、午前は三和製紙株式会社へ、午後は高知県立紙産業技術センターにて関正純先生の講義、その後に鹿敷製紙株式会社を見学した。三和製紙では、湿式不織布の製造工程を見学した。不織布工場は初めての見学だったが、原料に違いはあるが抄紙と同じ工程で製造されていることがわかった。厳しく環境管理され、機械と人の目によるダブルチェックの検品がされており、品質の確かさを感じた。工場見学の後は楮のプランテーションを見学した。見学時期は 11 月だったが、4 ～ 5 メートルの高さに伸びた楮の木が整然と並ぶ様子は圧巻である。足場が組まれており高所はトロッコを設置して芽かきなどの手入れをして、太く真っ直ぐの一本ものに育成させるという。収穫期には 6m まで成長するそうだ。原料確保の為に自社生産しているが、これだけでは足りず購入もしているということだった。

関正純先生の講義で特に印象に残っているのはペーパースプリットの説明である。文献や学生時代の授業で知っていたが機械を目前に説明を受けることができた。一度破壊してから再構成する

山間部から見た仁淀川

ペーパースプリットは、日本では実際の文化財に対して行われた事例はないが、欧州では大量強化処置法として行われてきた歴史があり、両者の文化財保存に対する考え方の違いが伝わってくる。

鹿敷製紙では、機械による極薄楮紙の抄紙を見学した。原料の下処理から紙料調整まで手作業が多く手漉き和紙と同じである。抄紙から乾燥、巻き取りは機械で行われるが、その速度や圧力などの調整がとても繊細ということだ。工場で扱う原料は全て国産というこだわりだが、原料調達のためにも楮農家存続のためにも農家と共同の楮収穫や農家からの原料購入を積極的に行っているという。経営者の理念も伺うことができ、信頼して使用することができると思った。

３日目は、午前は尾崎製紙所、午後はいの町紙の博物館を見学した。尾崎製紙所は仁淀川の上流域にある。市街地からバスで１時間半、よく曲がる山道を登って山間部に辿り着いた。車窓の景色は茶畑と仁淀川、そして青空、空気は一層澄んだように感じる。何というか宮崎駿の世界である。尾崎製紙所に到着した時はちょうどお母さんが三椏を漉いていた。尾崎製紙所は斜面にあるので、漉き場から干し場までにちょっとした山道を登る。水分を含んだ紙床は重い。今は手製のゴンドラに乗って宙を運ばれていくが、数十年前までは人力で運んでいたという。その為、漉き手は女性、干し手は男性という役割分担ということだった。こちらの楮紙は自家製楮 100％の清帳箋と言って、ハリがあり目の詰まった強い紙なのだが、この特徴を出す為の原料の下処理の方法について説明があり、原料の下処理から紙料調整によって紙の特性が決まることがわかった。

いの町紙の博物館では池典泰先生の講義と展示解説を受けた。高知の紙産業の歴史について説明があり、紙は日本にとって重要な輸出品であり、高知がそれに大きく貢献してきたことがわかった。展示室では、展示の終盤に壁一面を用いて楮の束が紙になるまでの工程でどれだけ小さくなるかを一目瞭然と並べていた。旅の締めくくりとしても、非常に印象に残った。

全ての訪問先について語りつくせない。それだけ有意義な研修だった。高知で迎えてくださった全ての関係者の方と事務局に感謝します。

茨城楮生産現場体験学習

平成 30 年度最後の実践コースは“大子那須楮”の産地である茨城県を訪ねました。「那須楮」は高知研修ツアー中にも職人さんのお話に登場しました。楮は土地が変わるとその繊維の質も微妙に変化します。高知県とは異なり、昼と夜の寒暖差の激しい茨城の土地だからこそ生まれる大子那須楮。大子那須楮保存会会長の齋藤邦彦様のご協力による体験学習を行いました。そして無形文化財に指定されている西の内紙「紙のさと」、「五介和紙」を訪問しました。

1日目

１日目はお昼に常陸大子駅に集合です。バスに乗り、大子那須楮保存会会長の齋藤邦彦様宅へお邪魔しました。齋藤様方の畑で楮の刈り取り、蒸し上がったものから剥皮作業、表皮取りと２班に分かれて交互に行っていきました。

２月は極寒時期のはずが、偶然暖かい日が続いており刈り取り作業では汗を流す受講生の皆さん。この時期は近所の方と一緒に一連の作業を行うそうですが、作業を通してかなりの重労働であることがわかりました。

表皮とりが一番難しい…奥様の齋藤眞佐子様が丁寧に教えてくれました。

楮を刈る位置を学ぶ（左）齋藤邦彦様

窯で楮を蒸す

刈り取った楮を束ね移動する

蒸しあがった楮を移動し、剥皮作業を皆で一気に行う

2日目

午前中は、袋田の滝へ。氷瀑で有名ですが、暖かい日が続いたため凍っていなかったのが残念…各自自由に散策です。

集合写真：袋田の滝にて

午後は、常陸大宮市に移動し西の内紙「紙のさと」へ。様々な和紙と製品がならぶ店内、資料展示スペースもあり見学させていただきました。県内外からの修復用和紙漉き依頼も多く、漉いてもらうことが出来ます。三代目菊池正氣様にこの土地で和紙生産をはじめた経緯や今後の課題などをお話しいただきました。

西ノ内紙
「紙のさと」

→「ねり」に使用される
黄蜀葵（トロロアオイ）の根

右）三代目菊池正氣様

最後は西の内紙「五介和紙」へ。和紙漉きの真最中で大迫力の作業を拝見しました！五介和紙製の学校卒業証書には校章の透かしなどが入っており、地場産業の取り組みも感じました。

西ノ内紙
「五介和紙」

↑和紙乾燥を行っている様子、質問にたくさん答えてくださいました

↑竹のしなりを利用して全紙判の和紙を漉く
四代目の菊池浩様

伝統的材料であり、修復業界では必須とも言える和紙ですが、楮生産者や紙漉き職人の減少、さらにはこれらに必要な道具を作る職人さんの後継者不足が深刻です。受講者の皆さんはこのような問題を受け止め、積極的に生産者の方々とディスカッションを行っていました。

本実践コースは詳しい様子はJCPブログにてお伝えしております（http://ameblo.jp/jcpnpo）。どうぞご覧ください。

初めて和紙に触れて

鈴木　祐香
（茨城県立取手松陽高等学校）

初めてこのツアーを知ったきっかけは、去年の十月に開催されていた「修復のお仕事展」で担当の方とお話した際に勧めて頂いたパンフレットでした。小さい頃から伝統工芸や文化財に興味があり、将来は日本の美術品を守っていく仕事に就きたいなと思っていた所、「修復士」という仕事に辿り着きました。しかし、「修復士」についてまだ調べ始めたばかりだったので、専門的な知識が無い中で参加するのはとても不安でしたが、周りの方々に親切にして頂いて、更に貴重なお話を伺えることが出来、素晴らしい時間を過ごすことができました。

紙となる楮を初めて見た時、皮の部分だけしか使えないと聞いて驚きました。蒸された楮は甘い焼き栗のような香りがして不思議でした。皮剥きの作業で生産者の方々は簡単に皮を剥いていましたが、実際にやってみるとかなり力が必要で大変な作業だと思いました。また、皮の黒い部分を削ぎ落とす作業も体験することができ、薄い皮を切らずに小刀で滑らせるのが難しかったです。

紙の里では、昔使われていた道具を見る事が出来ました。紙で出来た服や座布団などを見せてもらった時、洗うことも出来ると聞いて、紙には無限の可能性があると思いました。職人さんがその時代に合わせて様々な工夫を施して百年以上和紙を守っていきたいうお話がとても心に響きました。

五介和紙さんの工房では、大きな簀桁で紙を漉く様子は直接間近で見て、迫力があり印象に残っています。満遍なく繊維が均一に広がった出来立ての和紙はとても綺麗で感動しました。材料となる黄蜀葵は、育てる際に雨に濡れてもその粘りが出てきてしまうと聞いて、非常に繊細な植物なんだなと感じました。和紙の乾かし方も、鉄板に貼り付けて熱で水分を飛ばす方法がとても大胆で見ていて面白かったです。

今回ツアーを通して、質の良い和紙を作る為に多くの人が関わっているという事を強く感じました。また、昔の人の苦労や努力が詰まった“和紙”にさらに興味が湧きました。食事会もとても楽しく、実際の現場での生の声を直接聞けたり、「修復士」になるためのアドバイスを下さったりと、本当にお世話になりました。また機会があれば、是非参加させて頂きたいです。ありがとうございました。

楮の剥皮作業

特集2

NPOJCP 九州支部事業「知覧特攻平和会館所蔵文書類の保存状態詳細調査」を取材して

報告者：八木三香（NPOJCP 本部事務局長）

令和元年夏、鹿児島空港に降り立った。２日前に台風が通過した南国の空はあくまで青く、真っ白な入道雲と鮮やかなコントラストを見せていた。今回の目的地は、鹿児島のさらに南端、南九州市知覧である。現在 JCP の九州支部では、知覧特攻平和会館において、収蔵品－主に紙資料－の調査事業に従事している。前回のニュースレター（No.34）で予告した通り、今号では九州支部のこの活動を紹介したい。

1．知覧特攻平和会館について

「知覧」と聞いて何を連想するだろうか？周囲に聞いたところ、まず「お茶」、次いで「開聞岳」、「武家屋敷」「温泉？」というものだった。「特攻隊」という言葉が聞かれなかったのはとても意外だったが、それだけ第二次世界大戦が過去へ遠ざかっているということなのだろう。特攻（特別攻撃）を知らない若い読者に一応説明すると、日本がアメリカを中心とする連合軍と戦った第二次世界大戦末期、戦況が悪化する中で、航空兵が爆弾を積んだ飛行機に乗って敵艦に突っ込むという非情の作戦で、国際的には「KAMIKAZE」として知られている。必勝必爆を期したもので、もちろん生きては帰れない。今から考えれば無謀としか言いようのないものだった。知覧特攻平和会館は、特攻隊員の遺した手紙や愛用品、軍服、当時使われていた飛行機などを保存、展示している。

今回の取材に当たり、お世話になったのは坂元恒太学芸員と八巻聡学芸員のお二人である。坂元学芸員は地元出身、お話しぶりから特攻隊の存在を後世に伝えるという使命感に溢れていることが感じられたが、聞けば親の世代ももはや戦後生まれ、戦争の話は辛うじて祖父母から聞いたことがある程度とのことだった。むしろ学校の授業などで学ぶ中で独自に興味を持ち、

知覧特攻平和会館

知識を蓄積していったとのことである。このお二人に平和会館の成り立ち、そして JCP が所蔵品の調査事業に乗り出す経緯をお伺いした。

坂元学芸員）昭和 30 年から、特攻隊員の慰霊祭というものが毎年知覧町で行われていました。その際遺品を持って来られるご遺族がいて、町がお預かりしていたのですが、数が徐々に増えたため、昭和 50 年に「特攻遺品館」を開設しました。それが昭和 62 年に平和会館に発展したのですが、そもそもご遺族に見て頂くことが公開の目的だったため、保存ということはあまり考えていませんでした。収蔵庫ができたのは漸く平成 21 年です。それまで年中無休の展示のため、休みなく照明に曝されていたのも事実です。

館内展示　海軍零式艦上戦闘機

館内展示

平成 25 年、市が中心となり、収蔵品の保存検討委員会が立ち上がった。検討委員として加わり、座長を務めたのが、当時九州国立博物館 博物館科学課課長、現在弊機構九州支部の本田光子支部長だった。検討を重ねる中で、平成 26 年に保存管理計画が策定された。

坂元学芸員）平成 27 年にはデータロガーを導入、温湿度管理を行うと共に、年間許容照射量についても検討されました。この流れの中で、平成 29 年から全体の状態調査を行うことになり、JCP の九州支部に支援を求めることになりました。その結果、JCP から文化財保存の専門家が来て、実際に所蔵品の調査を進めると共に、現地の我々がノウハウを学び、いずれ地元の人間だけで調査、保存を行えるよう計画を立ててくれました。

一方、八巻学芸員は戦史関係が専門とのこと。平成 15 年に同館に赴任。入館されてから学芸員の資格を取ったとのことである。入館されたころは戦争体験者の多くが比較的健在であったため、聞き取り調査を進めていた。その中で遺族から遺品の存在を知らされ、館へ寄贈、寄託してくれるよう声掛けを行った。平成 21 年に収蔵庫を作った際にも遺族への報告を怠らなかったという。そうした中で遺品の収集は更に進んでいった。

平成 25 年から 29 年に掛けては遺品のレプリカ作りを進めることができた。当初は遺品の内容が重要と考えられ、原本を集めていない例もあったそうだ。ここに、戦争資料の特殊性が垣間見られる。

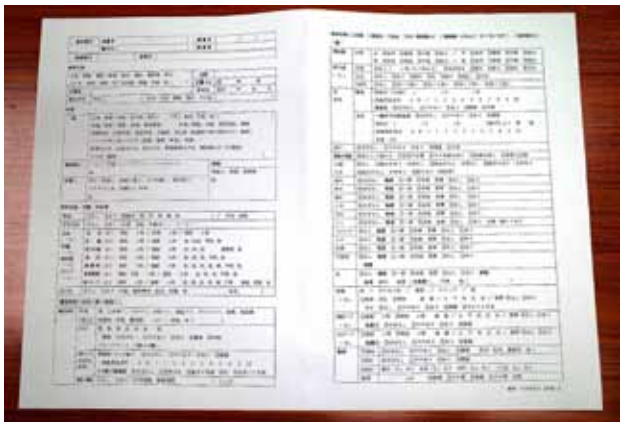
八巻学芸員）当館収蔵品の特徴として、遺族の方が仏壇に上げて拝んでいたという経歴を持つものも多いです。ですから線香のにおいが染みついているものがいくつもあります。桐の箱に入っているものもありました。また、最初は特攻隊員のご両親がまだ健在でしたから、オリジナルは「形見」ということで手放したくない。本当に掛け替えのないものだったのです。ご遺族が原本を保管していたので、複写させて頂いたものを館に寄贈してもらいました。とても「文化財」という位置づけではなかったと思います。平成 10 年代に入り、ご両親の世代が亡くなっていくにつれて、次世代がまとめて寄贈してくれたりするようになりました。

特攻平和会館の学芸員と共に、状態調査の計画を話し合う JCP 専門家。
左奥）本田光子九州支部長　左手前）大林賢太郎関西支部長
右奥）坂元恒太学芸員　右手前）朝隈克博館長

2．NPO JCP の調査事業

このようにして収集された資料は、現在 JCP のメンバーが平和会館職員の協力を得て一点一点調査し、中性紙（AF プロテクトｈ）で作ったタトウに挟み、さらに中性紙封筒に移し替えて保管という作業を続けている。調査対象は紙資料だけで 400 点あまり。所蔵紙資料総数は数千点という。その多くは隊員が家族や親しい人に認めたものだ。遺書ともいうべき書跡、見送る側の人の寄せ書きなどもある。

調査は一点ずつ丹念に損傷状況を記録していく。調査票は JCP が作成したものだが、どんどんカスタマイズされて、現在は A3 判に収まりきれないほどのデータ項目がある（下図参照）。



調査票

取材にご協力くださった
左）八巻聡学芸員　右）坂元恒太学芸員

資料の寸法・状態を調査書へ書き留めていく。
左）JCP 会員の内田祥乃さん　右）坂元学芸員

調査が済んだ資料をフォルダーに挟み、中性紙（AF プロテクトｈ）の封筒に収納する。
左）八巻学芸員　右）JCP 九州支部の松尾かをるさん

調査工程は下記のとおり

① 撮影
② 計測
③ 肉眼による観察
④ 透過光による観察
⑤ 斜光による観察
⑥ 顕微鏡による観察
⑦ 紫外線による観察
⑧ 紙の色度を測る
⑨ フォルダーに包み、収納

特に④は、肉眼では分からない折れ部分の劣化度や紙質などが明瞭となり、今後の取り扱いについて貴重な情報を得ることができる。また、下図にあるように、紙の色度を測り、劣化の目安にもしている。戦時中と言えば、物資不足により最も悪い質の紙が出回った時代である。またブルーブラックインクで書かれた手紙などは、すでに文章が消えかかっているものもあるという。正に時間との勝負。今調査に着手できたことは、不幸中の幸いだったかもしれない。調査に参加しているメンバーの内田祥乃さんは言う。「この調査は、安全に触（さわ）れるか、注意を要するか、触ってはいけないかの見極めを行うためのもので、その目的は隊員の遺した言葉、思い、ものを次世代へも伝えて行くことにあります。ですから大切に慎重に調査しています。」

色度を測っている写真、白い立方体の機器が簡易色度計
パソコンやタブレットにデータを送って色差を見ることができる。

「最初はついつい手紙の内容を読んでしまいましたが、そうすると手紙の内容で胸が迫り、調査どころではなくなってしまう。ですので今は割り切ってモノの状態調査に集中しています。」と、坂元さん。

相談を受けた本田光子支部長によると、あくまで将来的に地域の人々が自力で作業できるよう支援するというのが支部事業の方針であるとのこと。そうした中で、当該機関自身による保存の意義についての認識・発信が地域社会や行政の理解へ繋がり、資料保存を恒常的職務の一環として取り組む体制が充実されることを目標としているという。令和２年度には所蔵資料の保存と活用などを担当する学芸員が新たに１名加わることになっている。

現実に知覧特攻平和会館ではこの方向へ進んでいるようだ。

３．今後の展開～国内外への存在証明として

第二次世界大戦関連の資料というと、どうしても政治的文脈で語られることが多く、さまざまな雑音に曝されがちという事実がある。しかし思想信条にかかわらず命を散らさざるを得なかった若者たちは、確かに自分がこの世に生きていたということを、誰かに語り継いでほしいと願っているはずだ。それは、私たち一人一人が存在証明を求めるのと全く変わらない。生きた軌跡を固有名詞無しで終わらせられたとしたら、どんなに無念だろうか。

八巻さんは、遺品受け入れ時の状況を記録している。兵士になってからのものだけでなく、生い立ちが分かる幼少期のものも可能な限り受け入れて、隊員のバッ

クグラウンドや人柄を掘り起こす作業をされているそうだ。八巻さんが聞き取りを行った元特攻隊員や遺族の数は、相当数に上る。その八巻さんでも、若者に指令を出した指揮官や参謀クラスの聞き取りはできなかったとのこと。体験者や遺族が鬼籍に入っていく中、現場で何が起きていたかは、今後益々モノを通じてしか伝えられなくなっていくだろう。

坂元さん、八巻さんとも、純粋に特攻隊となった若者ひとりひとりのことを後世に伝えようとしている。館には戦争体験者の語り部の方もいらっしゃるが段々と退職し、戦後生まれの語り部が先輩の言葉を伝えようとしている。しかし臨場感が段々と薄まっていることは否めない。今後の課題である。

同館では平成 29 年度から出張展示を行っている。東京の中央大学を皮切りに、平成 30 年 2 月には銀座のギャラリー、本年 2 月には大阪のギャラリーと、活発に発信を続けている。知覧特攻平和会館を訪問するのが遺族や関係者が多いとすれば、ギャラリーにおいては特攻隊をよく知らない世代が多い。それでも銀座では 6 日間の開催で 2,000 人もの入場者を迎え、一定の手ごたえを得たとのことである。歴史を風化させないという意味において貴重な取り組みだろう。

もうひとつ、是非ともご紹介したい展示例がある。真珠湾攻撃の舞台となったハワイのオアフ島に戦艦ミズーリ記念館がある。戦艦ミズーリは日本軍と戦い、昭和 20 年 4 月 11 日に特攻機の攻撃を受けた。ミズーリは沈まなかったが、特攻隊員は亡くなった。ミズーリの艦長は、戦死した特攻隊員を勇士として丁寧に水葬したという。

ミズーリは終戦後戦艦としての役割を終え、戦争の悲惨な歴史を伝える記念館となって一般公開されている。知覧特攻平和会館はその趣旨に賛同して協力を申し出、特別展示「カミカゼ展」が実現した。この展示は大変好評で期間が延長され、現在でも展示が続けられている。奇襲攻撃で甚大な被害を蒙ったアメリカ人が日本軍関連の展示をどのように受け止めるのか、日本人であればだれしも気になるところだが、その懸念は無用のようだ。特攻隊員の恋人へあてた手紙、母へあてた手紙などが展示され、感動を誘っている。こうした展示は世界を見ても決して多くはないと思う。歴史を冷静に振り返り、非難し合うのではなく共感し合う展覧会が広がったら、今の国際情勢も少しは好転するのではないだろうか？

最後に、企画展を見た人たちの感想を引用して筆を擱きたい。

「No matter the side of the battle, every life is precious. This exhibit really brought this home for me.（意訳）戦争のどちらの側にいるかが問題ではなく、どんな命もかけがえのないものである。企画展を通してこのことが身にしみた。」

「Let's keep peace in the world.16 million deaths are enough. No humans deserve to die and deserve war.（意訳）平和な世界を維持しよう。1,600 万人、もうこれ以上の死は見たくない。死んで良い人間も、戦争をしてよい人間も、一人だっていない。」※

展示が持つ力を改めて感じると共に、展示される資料を裏で支える保存の大切さを再認識した取材だった。

最後になりましたが、お忙しい中ご協力を頂いた坂元恒太学芸員、八巻聡学芸員、知覧特攻平和会館の皆様に厚く御礼申し上げます。

※引用文献：「戦争体験を「語り」・「継ぐ」広島・長崎・沖縄　次世代型の平和教育」（2018 年 2 月 20 日　発行；株式会社　学研プラス）

戦艦ミズーリ記念館（米ハワイ州）

戦艦ミズーリ記念館（知覧特攻平和会館 HP より）
URL:https://www.ussmissouri.org/

知覧特攻平和会館（鹿児島県）

知覧特攻平和会館（知覧特攻平和会館 HP より）
URL:http://www.chiran-tokkou.jp/

予告

令和元年度 JCP セミナー「文化財保存修復を目指す人のための実践コース」後半

今年度は「工芸」をテーマに、前半を染織品、後半を陶磁器や漆に関する内容で構成しています。お陰様にて前半の「染織品」基礎講座 /WS、長野絹織物製作現場見学は終了し、今回は 11 月「基礎講座－陶磁器・漆－」と 1 月「九州研修ツアー」のご案内です。

３回目の実践コースは基礎講座です。伝世品の中でも身近な陶磁器・漆工品を学び直し、修復の現場に立つ先生方に実践例を講義して頂くとともに、活発なディスカッションを展開して頂く予定です。

４回目最後は、染織品と陶磁器の分野において、日本伝統工芸界を担う方々の工房を訪ねます。技術者の方々と交流ができる貴重な機会ですので是非ご参加下さい。

Ⅲ．基礎講座－陶磁器・漆－

日程：2019 年 11 月 15 日（金）～ 17 日（日）
会場：東京国立博物館　黒田記念館セミナー室

黒田記念館セミナー室

Ⅳ．九州研修ツアー～伝統工芸を訪ねる～

日程：2020 年 1 月 16 日（木）～ 18 日（土）
1/16（木）　福岡空港集合、福岡県染織品工房を中心に訪問
（小川規三郎様、甲木恵都子様、松枝哲哉様・小夜子様）
1/17（金）　佐賀県陶磁器工房を中心に訪問
（十五代酒井田柿右衛門様、十四代今泉今右衛門様、
九州陶磁文化館、李参平窯、天狗谷窯跡、泉山陶石跡）
1/18（土）　佐賀県　鈴田滋人様、中里太郎右衛門様を訪問

国史跡となっている
太郎右衛門窯跡

詳しくはセミナー専用 HP（https://npojcp.wixsite.com/seminar2019）で確認できます！⇒
皆様の受講をお待ちしております。

編集後記

八木）知覧特攻平和会館で見た、飛び立つ直前の隊員の写真。その眼差しはとても静かで、なんと表現したらよいか…あえて言うならば「諦め」に満たされているとでも言うのでしょうか？私が空港で見た青空を、最期にどのような思いで眺めたのか…想像もつきません。

今回セミナーの参加記をお願いした皆様には、早期に原稿を提出して頂いたにもかかわらず、私の取材が遅れてこのような発行日となりました。毎度のことですが、本当にごめんなさい。

久下）　実践コースにおいて、飛行機に乗って出張訪問するのは初めての経験となりました。高知県は、自身が和紙に絵を描いているので絶対に訪れたいと思っていた場所です。そして、茨城県出身ながら、県北の大子および常陸大宮市は初めて訪問させていただきました。各地の楮原料に触れ、生産者さんとの交流できたことは、自身だけでなく参加者の皆様の活発な質問やディスカッションからも、大変有意義なものになったと思います。ありがとうございました。

謝辞

高知研修ツアーでは高知在住 JCP 会員の一宮佳代子さん、高知県立紙産業技術センターの有吉正明先生が、茨城体験学習では JCP 会員の嶋根隆一さん（伝世舎）が現地のコーディネイトをしてくださり、無事に終えることができました。記して感謝申し上げます。

高知では同センターをはじめ、三和製紙株式会社、鹿敷製紙株式会社、尾崎製紙所、いの町紙の博物館に、茨城では齋藤邦彦様をはじめ大子那須楮保存会の皆様、紙のさと、五介和紙、そして Daigo House 笠井秀雄様に大変お世話になりました。心から御礼申し上げます。

また、お忙しい中、高知研修ツアー、茨城体験学習参加者の声を執筆いただきました JCP 会員の山口麻諭子さん、鈴木祐香さんに重ねて御礼申し上げます。

ご入会ありがとうございました。

（令和元年 10 月 30 日現在入会者数）

- 理　　事　　8 名
- 維持会員　　15 名（役員含む）
- 登録会員　　143 名
- 一般会員　　117 名
- 学生会員　　47 名
- 監　　事　　1 名
- 評 議 員　　1 名
- 賛助会員　　25 件

株式会社　宇佐美修徳堂
株式会社　宇佐美松鶴堂
株式会社　岡墨光堂
株式会社　桂文化財修理工房
有限会社　紙資料修復工房
九州文化財研究所
京都造形芸術大学　日本庭園・歴史遺産研究センター
國富株式会社　長崎営業所
株式会社　光影堂
一般社団法人　国宝修理装潢師連盟
株式会社　坂田墨珠堂
株式会社　修護
株式会社　修美
株式会社　松鶴堂
修理工房　宰匠株式会社
中部資材株式会社
株式会社　東都文化財保存研究所
株式会社　トリアド工房
株式会社　半田九清堂
長谷川　聡
百元　節
株式会社　文化財保存
山領絵画修復工房
他　個人２名（アイウエオ順）

NPO JCP の活動に参加してみませんか？

■登録会員：年会費　7,000 円
文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。
登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、文化財に直接関わる専門家とは限りません。

■一般会員：年会費　5,000 円
この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

■学生会員：年会費　3,000 円
大学または大学院に相当もしくは準じる教育機関の学籍を持ち、この法人の目的に賛同して入会する個人。

□会員特典：季刊情報誌の送付
講演会／研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、ファックス、電話、メールにて申込用紙をご請求ください。折り返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申込ができます。
TEL：03-3821-3264　／　FAX：03-3821-3265
E-mail：jimukyoku@jcpnpo.org ／ URL：www.jcpnpo.org

※現在 JCP では、東日本大震災、熊本地震その他の被災文化財救援募金を受け付けております。ご連絡頂ければ、振込料無料の振込用紙をお送りいたします。
皆様の暖かいご支援を、どうぞよろしくお願い申し上げます。
※この他にも、随時寄附を受け付けております。
下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用ください。

・郵便振替　００１２０-４-１０５４５
NPOJCP
・三菱東京 UFJ 銀行　四谷三丁目支店
普通預金　３９６０３４０
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構
理事　三輪嘉六
・みずほ銀行　根津支店
普通預金　１７２７８９３
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構

NPO JCP NEWS vol.35
2019 年 10 月 30 日発行

特定非営利活動法人
文化財保存支援機構

事務所所在地
本部
〒 110-0008
台東区池之端 4-14-8　ビューハイツ池之端 102 号
TEL：03-3821-3264　FAX：03-3821-3265
E-mail：jimukyoku@jcpnpo.org　URL：　www.jcpnpo.org
関西支部
京都造形芸術大学　日本庭園・歴史遺産研究センター内
TEL：075-791-8519
九州支部
〒 810-0014
福岡県福岡市中央区平尾 2-2-18 シティマンション平尾 1　302 号
TEL : 092-791-5663 / E-mail : kyushushibu@jcpnpo.org

役員構成
〈理　　事〉　三輪　嘉六（理事長）
大林 賢太郎（副理事長・関西支部長）
西浦　忠輝（副理事長）
澤田　正昭
本田　光子（九州支部長）
増田　勝彦
三浦　定俊
松本　健
〈評議員〉　田邉 三郎助
〈本部事務局〉　八木　三香（事務局長）　／本　茉梨絵
〈関西支部事務局〉　伊達　仁美（事務局長）
〈九州支部事務局〉　松尾　かをる
〈編集協力〉　久下　有貴